

日本人就学前幼児による英語学習と英語力に関する調査

Research of English Learning by Japanese Preschoolers and Their English Ability

豊田ひろ子

Hiroko TOYODA

東京工科大学

Tokyo University of Technology

Abstract

The aim of this research was to observe how sixteen Japanese preschoolers (ages 2 to 6) learned English as a foreign language with their parents at home, and how much English they acquired. The children took part in a study program, using English study-materials produced by Benesse, which had four levels, all designed for preschoolers. For each level, four children were observed on video recordings, which were made at their homes for one year as they were studying English with DVDs, workbooks and audio tools. The findings were that the children were active learners of English and that the English they acquired was due to their being provided with scaffoldings: English study-materials were tailored to their levels of physical and cognitive developments, and parental support met their needs. Results also showed the level of English attainments and learner traits.

Keywords

Japanese Preschoolers, English as a Foreign Language, English Attainments

1. はじめに

日本では、2011年度に全国の小学校に外国語(英語)活動が導入され、早期英語教育への関心が高まっている。概ね、幼い頃から英語に接触していると、英語が得意になるのではという考えが支持されており、小学校に上がる前から、英語学習をする子どもたちがいる。しかしながら、外国語教育の研究によると、第二言語学習の成功は、学習開始年齢が低ければもたらせるとは限らない。学習者が、必要十分な量の英語に接触しており、有意義な言語学習を行う必要がある。日本では英語は生活言語として用いられておらず、接触量が限られている。しかも、就学前の子どもは、幼児として一様に扱われがちだが、身体的にも認知的にも著しい成長を遂げる。また、楽しそうに活動していれば何らかの効果はあるのかもしれないが、英語習得を生み出す楽しさは有意義な学習から生じている。つまり、子どもが英語学習で成功するためには、英語がたっぷりと与えられ、発達段階に適した有意義な学習を行うことが前提となる。

就学前幼児向けの英語教材に、(株)ベネッセコーポレーションの英語学習用通信プログラ

ム『こどもちゃれんじ English』の教材がある。このプログラムは、幼児の発達段階に考慮し、「ぼけっと」(2歳児～3歳児対象)、「ほっぷ」(3歳児～4歳児対象)、「すてっぷ」(4歳児～5歳児対象)、「じゃんぷ」(5歳児～6歳児対象)の4つのレベルが設けられている。教材は2ヶ月ごとに配送され、家庭で子どもが英語学習するのを、保護者が支援している。教材の使用言語は日本語と英語で、バイリンガル教材となっている。複数のメディアから構成されており、DVD、ワークブック、音声教材(玩具型、学習用)、紙付録などがある。多様なメディアの使用によって、子どもが英語に接触する量を増やし、子どもが飽きずに英語の理解と産出の両面で学習に取り組めるように工夫されている。

本研究では、『こどもちゃれんじ English』を、就学前幼児の発達段階に適した英語学習教材を提供しているプログラムとみなし、これを受講した子どもたち(合計16名、各レベル4名)¹⁾の様子を、1年間家庭でビデオ録画してもらって観察し、就学前幼児の英語習得の実態調査を行った。特に、DVD教材、ワークブック教材、音声教材を活用する際の子どもの英語の発声に注目し、子どもが習得している英語力について考察した。

2. 実態調査結果

2.1 DVD教材の活用の実態

DVD教材は、毎号必ず1枚配送されるものであり、最も活用度が高い教材である。DVDには、毎号の学習要素が、豊富な音声と映像で、約30分収録されている。発音、会話、歌、チャンツ、お話、体操などの英語学習のための様々なコーナー、子どもが好きな音声玩具教材の使い方を紹介するコーナーが設けられている。日英語のバイリンガル教材で、状況や取り組み方に関する説明には日本語が使用され、学習要素としての英語は日本語の訳を介さずに英語で与えられている。子どもは様々な教材の中でまずDVDを見て、英語学習要素に音声と映像で触れてから、音声教材やワークブックで英語学習をする。「しまじろう」というキャラクターが、一緒に英語を習うという設定で、「君も一緒に言ってみよう!」「せーの」と発声を呼び掛ける場面もある。他には、リモコン操作で子どもがクイズに答えるインタラクティブな機能も付いている。

「ぼけっと」の学習者(2歳～3歳)は、プログラムを始めたての1年生である。たいてい保護者と一緒に、ソファに座ってDVDを見ている。体が小さい低年齢の子どもは、保護者が膝に乗せて見ていたりする。「ぼけっと」ラインの子どもは、集中が比較的持続しにくい。子どもの集中が途切れて他の活動を始めてしまい、DVDの音声がBGMになってしまうこともある。そのため、保護者は、子どもの集中力を高めるために、様々な工夫をする。保護者は、「わあ、楽しそう」「あ、ハンバーガー作るんだね」などと、DVDを見るように声を掛け、DVDの英語をまねして聞かせる。歌に合わせて、一緒に踊り、子どもの手足を動かす。DVDの場面と同様の状況を部屋の中に作り出し、DVDの中で進行している英語活動に、子どもが取り組めるようにする。例えば、乗り物の音声を聞いてシートを踏む英語学習活動が紹介されると、すぐに床に教材のシートを並べ、子どもがDVDを見ながら活動できるようにする。一方、子どもは、DVDの映像に出てくる教材や、関連する物を実際に手で持ち、動かすなどしながら見ている。例えば、音声教材のギターが映像に現れると、自分のギターを持ってきて、DVDを見ながら演奏のまねをする。「Honk, honk」と音を立

てて走る車の映像が出てくると、自分の玩具のミニカーをテーブルの上で動かして、英語をまねる。その姿は、あたかも、集中力を自ら高めようとしているかのようだ。五感を使って物事を知ろうとする体験型学習者であるこの時期の子どもにとって、保護者の声掛け、スキンシップ、実際の物は、仮想空間であるDVDと一体化するための橋渡し効果があるツールなのかもしれない。

「ほっぷ」の学習者(3歳～4歳)はプログラム2年生である。彼らも保護者と一緒にDVDを見るが、「ぼけっと」生よりも集中力があり、積極的に体を動かす。座って見ている、歌やチャンツが流れると自らモニターの前に走り出て、映像を見ながら楽しそうに音楽に合わせて踊る。数字や色の英語を学習するコーナーでは、映像を見ながら英語を聞いてまねる。男の子はソファの上を跳ねながら、体全体を使って、DVDの英語をまねたりする。

「すてっぷ」の学習者(4歳～5歳)は、保護者が見守る中、DVDをひとりで見続けることができる。本研究の「すてっぷ」生は、「ほっぷ」から受講しており、プログラム2年生だった。映像の内容を理解することに集中する傾向があり、英語のまねが減る。しかし、保護者が「英語で言ってみて」と声掛けをすると、ごく自然に英語で発声する。クイズに積極的に答える。日本語でしばしば感想をつぶやくが、英語の単語や会話表現も聞き取れている。

「じゃんぷ」の学習者(5歳～6歳)は、DVDをひとりで見ることができる。本研究の「じゃんぷ」生は、「ほっぷ」から受講していたので、プログラム3年生だった。映像の内容に集中し無口になる。DVDの「せーの」の掛け声で英語を発声する。日本語で感想をつぶやく。クイズに積極的に取り組み、正解すると喜ぶ。自分なりに映像と音声から意味を推測する。微妙に理解がずれていることがある。例えば、「long」を「大きい」と答え、「want」と「like」を混同する様子が見られる。保護者が子どもの意味の理解を確認し、正しい情報を与えている。「What do you like?」などの質問に、自分なりに一生懸命に考えて、英語で答えようとする。DVDに設けられたポーズが時間切れになってしまい、答えられないこともある。自分のペースで取り組めるワークブックで復習し、DVDで再度試みると言えるようになる。

このような観察から、DVDには豊富な音声と映像が収録されていて、外国語学習には効果的な教材であるが、それをただ見るだけでは英語は習得されることがわかる。発達段階によって子どもの集中力や、認知力、身体能力が異なり、DVDを活用できる程度も異なる。したがって、DVDの内容は発達段階を考慮して制作されなければならない。そのようなDVDが与えられたとき、子どもは足場(scaffolding)を得て、それぞれの発達段階における特性を活かして、DVD教材を活用できる状態になる。つまり、子どもが実質的な学習に取り組めるようになる。保護者も、子どもが学習できるように、学習環境を準備し、声掛けをし、必要な英語を教えるなど、様々な足場を与えている。幾重にも組まれた足場を子どもが利用して、実際に学習が起こって初めて、英語を習得しているように思われる。

2.2 ワークブック教材・音声教材の活用の実態

すべてのレベルで、親子が一緒に取り組み、主に英語の語彙学習が行われているのがワークブック教材である。ワークブックは毎号1冊配送される。この教材の魅力は、子どもが自分のペースで学習に取り組めること、特に、保護者の助けを得て、英語の意味を確認し

ながら、英語を習えることだろう。子どもがワークブックの課題(例：めいろや絵のまちがいさがし)を行うとき、保護者は、課題に必要な英語を子どもが覚えているかどうか確認し、わからない場合や誤って覚えているとき、簡単な説明をして、正しい英語を聞かせている。保護者の英語を聞くと、子どもはごく自然にまねて発声する。また、その英語を使って、自分なりに英語を発声する。そのため、ワークブックに取り組むときの子どもの発声は、保護者の英語の発声量に比例し、教材の中でも最も多いのではないかと思われるほどである。一方、英語が苦手な保護者にとっては、ワークブックが負担になることがある。ワークブックには音声が入っていないことが主な理由のひとつとなっている。保護者によっては、音声教材を併用して、英語を子どもに聞かせるなど工夫をしている。

保護者の関わりが大きく求められるワークブックに対して、音声教材は子どもが主体となって使うもので、子どもだけで取り組めるものもある。音声教材には、「ぼけっと」と「ほっぷ」の年少者が、録音された音声をボタン操作で再生し、英語で遊ぶためのギターやキーボードなどの形をした玩具型のものと、「すてっぷ」と「じゃんぷ」の年長者が、英語で単語学習やクイズをするペンタッチ式の学習用のものの2種類がある。前者はほぼ毎号に1つ、後者は「すてっぷ」開始時期に、ベースとなるペン付操作台が送られ、以後、台に挟んで使う教材が毎号送られてくる。「ぼけっと」生と「ほっぷ」生は、機械操作と使用する英語を保護者に助けてもらい、保護者とやりとりする中で、英語の発声がある。例えば、録音機能付マイク教材は、子どもが自分の声を吹き込んで再生できるもので、操作方法を教えてもらい、自ら上手に英語を発声して録音している。一方、「すてっぷ」生と「じゃんぷ」生は、特にペンタッチ式の学習用教材を使うとき、自分で機械操作し学習活動に集中するので、英語の発声がほとんど起こらない。しかし、他の音声教材を併用して、紙付録のBINGO やすごろくなどをすると、勝とうとして、積極的に英語を発声する。全レベル共通して、家族と一緒に、英語を使って遊ぶときの子どもは嬉しそうにしている。両親、兄弟姉妹も嬉しそうに参加している。このように、音声教材は、英語の使用が限られた日本の生活の中で、英語を使って他者とつながる貴重な体験をさせてくれる。子どもにとって、幼年時代の楽しい英語体験の思い出を残してくれるものとなっている。

このような観察から、DVD教材の活用と同様、ワークブック教材も音声教材も、それをただ眺めていたり触っていたりするだけで、子どもが自動的に英語習得するわけではなく、教材や保護者からの足場の提供があり、子どもが実質的に学習に取り組み、英語力を獲得していることがわかる。

2.3 就学前幼児の発声と英語習得に関する考察

2.3.1 子どもの発声の種類と関連する英語力

本研究では、英語学習に取り組む子どもたちの「英語の発声」に注目し、どのような発声があるかをビデオ観察によって調査した。その結果、発見された子どもの英語の発声には次の5種類があった。

- (1)「英語を聞き、意味がわからず、まねをするときの発声」
- (2)「英語を聞き、意味がわかり、まねをするときの発声」

- (3)「英語を聞かずに、日本語を与えられて(例：「英語で〇〇(日本語)は何て言うの?」と聞かれて)、それに相当する英語が言えないときの発声」
- (4)「英語を聞かずに、日本語を与えられて(例：「英語で〇〇(日本語)は何て言うの?」と聞かれて)、それに相当する英語が言えるときの発声」
- (5)「英語を聞かずに、自ら言いたい英語が言えるときの発声」

これらの発声のうち(1),(2),(4),(5)の4種類は、概ね、「ぼけつ」と「じゃんぷ」という子どもの発達段階に沿って、(1)→(2)→(4)→(5)の順序で現れ、残る1種類の(3)の発声は、全体的に分布しているように思われた。さらに、英語の発声の性質から推測し、習得されていると思われる英語力について考察すると、次のような英語力と関連しているように思われた。すなわち、(1)の発声は「英語を聞き、再現する能力」、(2)の発声は「英語を聞き、意味を理解する能力」、(3)の発声は「日本語を聞き、それに相当する英語の代わりになる言葉を補う能力」、(4)の発声は「日本語を聞き、それを英語に訳せる能力」、(5)の発声は「習った英語を思い出して、メッセージを作り出せる能力」に関連していると思われた。

本研究では、子どもたちの英語の発声を、子どもたちがDVD教材、ワークブック教材、音声教材を活用する際の様子から、多角的に観察する手法を用いた。DVDを見ているときの子どもたちの英語の発声を観察するだけでは、子どもたちが意味まで理解して発声しているかどうか判断するのは難しかった。保護者が意味確認するためにDVDを止められることはなく、継続再生されていたからである。その代わり、DVDと内容的に関連しているワークブック教材や音声教材を使うとき、子どもは保護者と日本語で意味確認を行っていたりしたので、DVDを見ながら発声していた英語を、子どもが理解しているかどうかを判断することができた。表1に、本研究で発見した5種類の英語の発声と、これらの発声と関連していると思われる英語力を示す。以下、その説明と考察を述べたいと思う。

2.3.2 発達段階ごとに観察される学習者の発声の特徴に関する記述と考察

2.3.2.1 「ぼけつ」生(2歳～3歳)と「じゃんぷ」生(3歳～4歳)

「ぼけつ」の学習者の英語の発声は、たいてい「英語を聞き、意味がわからず、まねをするときの発声」のようだ。耳が柔軟だが、英語を聞きながら、映像の視覚的情報を見る余裕がないためか、すべての映像を意味の理解に活用することができない様子が見られる。映像を見ている、英語が聞こえていない様子も見られる。「ぼけつ」生は、英語を聞こえるまま、単純に繰り返し、意味がわからなくても違和感がないように見える。この状態から、徐々に意味を覚えてゆく、すなわち、第一言語習得に似た第二言語習得が起こっているように思われる。例えば、DVDで音声を聞き映像を見ながら「peach」と発声していても、後でワークブックで保護者が「これは何?」と桃の絵を指差して聞くと「もも!」と日本語で答え、「英語では?」と聞くと「わからない」と言う。その直後に、保護者が「peach」と英語を聞かせると、ごく自然に「peach」とまねる。英語でまねはできているのに、「これは何?」と聞かれても日本語が口をついて出る。日本語に相当する英語を、保護者に聞かせてもらってまねる、という一連の流れを繰り返して、子どもは少しずつ英語の音と意味を結びつけて覚えてゆくようだ。ワークブックは、学習者のペースで、意味確認ができるので、英語学習には効

表1 就学前幼児の英語の発声の種類と英語力

「レベル」 学習年齢	英語学習年数/ 英語接触量	英語の発声の種類		英語力	
「ぼけっと」 2歳～3歳	1年目 / 1年間	(1)英語を聞き、意味がわからず、まねをするときの発声。	(3) 英語を聞かずに、日本語を与えられて(例:「英語で○○(日本語)は何て言うの?」と聞かれて)、それに相当する英語が言えないときの発声。	(1) 英語を聞き、再現する能力。	(3)日本語を聞き、それに相当する英語の代わりになる言葉を補う能力。
「ほっぷ」 3歳～4歳	2年目 / 2年間	(2) 英語を聞き、意味がわかり、まねをするときの発声。	あてずっぽうで無関係な英語の発声。 ↓	(2) 英語を聞き、意味を理解する能力。	
「すてっぷ」 4歳～5歳	2年目 / 2年間	(4)英語を聞かずに、日本語を与えられて(例:「英語で○○(日本語)は何て言うの?」と聞かれて)、それに相当する英語が言えるときの発声。		(4) 日本語を聞き、それを英語に訳せる能力。	
「じゃんぷ」 5歳～6歳	3年目 / 3年間	(5)英語を聞かずに、自ら言いたい英語が言えるときの発声。	英語に相当する日本語の英語っぽい発声。	(5)習った英語を思い出して、メッセージを作り出せる能力。	

果的であると思われる。ワークブックに音声が付いていないのは難点だが、英語が苦手な保護者は、玩具型音声教材を活用して、子どもに英語の音声を聞かせるなど工夫している。

「ぼけっと」生は、日本語と英語を一緒に聞いてしまうことがある。耳が敏感な上、英語を聞く経験が浅く、日本語と英語を聞き分けられないのかもしれない。例えば、「Bird、あ、とんだ」というDVDの台詞を聞いて、「トンデバー」と聞き取る。「バー」は実は「bird」で、この部分だけが「鳥」を意味することを、後で知る。また、英単語の特に語尾の子音の発音が消失することがある。日本語の発声からもわかることであるが、発声器官が未発達であるためと思われる。例えば、「ladybug」を「レデバー」、「elephant」を「エレファン」、「Honk, honk」を「ハーン、ハン」、「Hurry up」を「フーリーアー」と発音する。しかし、カタカナ語に影響されず、「ホーンク」を「ハーン(ク)」、「ハリーアップ」を「フーリーアー (ッブ)」と正確に発音していることから、子音の後の母音の微妙な口の開き具合が聞き取れていることがわかる。

「ほっぷ」の学習者も英語をまねて発声するが、聞こえてくる英語の意味を意識しながらまねる点で、「ぼけっと」の学習者と大きく異なる。「ほっぷ」生の意味のこだわりは、DVDで習った英語を、玩具型音声教材のお菓子屋さんごっこで使うときの様子にも認められる。すなわち、絵が描かれたカードを音声再生機に差して、自分が予想していた英語と同じ英語が流れてくると、嬉しそうに跳び上がる様子からもわかる。実際、「ほっぷ」生を観察していると、英語の音を聞きながら映像の絵を見る余裕があるように思える。それは、「ぼけっと」

を既に1年間受講し、英語を聞く経験をしているので、耳が英語に慣れていることや、英語教材や英語学習に慣れていて教材を活用する力が付いていること、同時に、認知発達に伴い日本語が定着してきて、絵が意味するものが何であるか一目見てわかるまで成長していることなど、複数の要因が理由となっているように思われる。

「ぼけっと」で、保護者に「これは何？」と聞かれて日本語で「もも！」と答えていたのが、「ほっぷ」の下半期になると、英語で「Peach!」と答えられるようになる。しかし、日本語から英語へのトランスファーは必ずしも容易ではなく、試行錯誤の様子がうかがわれる。例えば、ワークブックで「train」を習うとする。「ぼけっと」生は、電車として載せられた写真を見て「ごひゃっけい」と答える。つまり、自分が知っている具体的な乗り物の名前を日本語で答える。この状態で「train」と教えると、「ごひゃっけい」が「train」になってしまう。「ほっぷ」生になると、「ごひゃっけい」を含めた「電車」という上位概念の名前がわかる状態になる。しかし、「train」と教えても、「トレインシャ」と言うなど、すんなりと正常なトランスファーが起こるとは限らない。関連語同士を混同し、「ぼけっと」生は「トレインにステーションが入ってきた。」のような言い方をすることもある。「ほっぷ」生は、このような意味的な混同を避けるために、自分が覚えにくい数字の2を「カーズ2のツーだよね。」、7を「イトーヨーカドーだよね。」(母親「そうね、セブンアンドアイね。」)など、自分が思い出しやすいように連想法を使い、正常なトランスファーを起こそうとする様子が見られる。

また、歌に関しても、「ぼけっと」生は、歌詞の意味がわからなくても、英語を聞き取り、聞こえてくる音楽と同じような感じで口ずさむことができ踊れると、それなりに達成感を抱く。「ほっぷ」生になると、意味へのこだわりがあり、歌詞通りに歌い、踊ろうとする努力を見せる。例えば、「ほっぷ」生は、DVDで見た歌を、音声教材で再生し、じっと聞きながら、歌わずに足だけでリズムを取り続ける練習をしたりする。また、DVDを見ているときも、「Head, Shoulders, Knees and Toes」の後半で「Eyes and ears and mouth and nose」の部分の意味がわからないと、保護者に「Eyes はここ？」などと確認する。

「これ英語では何？」と聞かれて、英語がわからなかったときの学習者の答え方も興味深い。「ぼけっと」生であれば、「yellow」を「パイロッチュ」、「blue」を「バッチ」などあてずっぽうに無関係な英語を言うが、「ほっぷ」生以上は、その英語に相当する日本語を英語っぽく発声する様子が見られる。例えば、「緑」を「ミドーリ」、「はさみ」を「ハサーミ」のように発声する。つまり、日本語が定着し、1年以上英語を聞いている学習者は、英語が思い出せないとき、意味的に対応している日本語を思い出し、それを英語らしく発声する傾向がある。同時に、英語に接触する経験を重ねながら、子どもなりに、「英語らしさ」を体感し習得しているように思われる。このような観察から、若い学習者たちは、幼いながらも、最初はまねるが、次第に機械的なまねから、意味を意識したまねをするようになり、やがて特定の意味に相当する英語を思い出して発声しようとするのがわかる。

「ほっぷ」生は、「ぼけっと」生よりも、日常生活で行動範囲が広がり、社会性が身に付いている。おままごと遊びの役割分担も理解できるので、DVDで習う会話表現を、おままごと遊びの教材で練習することができる。例えば、「わたしがおねえさんであなたはママだから、(商品のカードを)さわっちゃだめね」と言い、店員役をはつらつとこなし、「Here you are.」と言う。保護者は「Thank you.」と言うやりとりが成立する。また、保護者が「男の子にプレ

ゼントを探しているのですが、お勧めはありませんか」と聞くと「そうですね、ロボットはいかがですか」と答え、「Robot, here you are.」と渡すこともできる。「女の子用のものもありますけれど」と言って「キャベツ, hamster, here you are.」と、おままごと遊びを自由に創造することができる。日本語が多く、英語の発声も文法的に不完全な部分があるが、覚えた英語を、社会性のある遊びの中で言葉として楽しく使い、定着させ習得している。

2.3.2.2 「すてっぷ」生(4歳～5歳)と「じゃんぷ」生(5歳～6歳)

「すてっぷ」と「じゃんぷ」の学習者は、DVD を見るとき、その内容を理解するのに集中してしまい無口になるが、他の教材を使っているときに、DVD で習った英語を発声している。例えば、「すてっぷ」生は、DVD で見た単語に関して、ワークブックで、保護者に「電車は？」と聞かれ「Train.」、**「傘は？」**と聞かれ「Umbrella.」と即座に答えることができる。「すてっぷ」生になると、英語の定着が進むので、ペンタタッチ式の英語学習用音声教材のシートで、相手の顔が見えない状態でする会話の活動も楽しむことができる。また、英語学習を始めて2年目の下半期には、DVD の映像と音声で習ったチャンツの会話表現も、ワークブックで復習するときに思い出すことができる。例えば、次のような会話があった。母親「さっきDVD で見たよね。帰ってくるときに言う言葉。忘れちゃったか。I'm home.」子ども「ディデュハブハア？」²⁾ 母親「…。え、Kくん、今、Did you have fun? って言った？」子ども「うなずく。母親「えー、ママびっくりしちゃったよ。すごい、すごい。」発音には不完全な部分があるが、英語の音声を与えられなくても思い出せるほど、英語を聞き取る耳と英語の記憶力が育っている様子がうかがわれる。

また、「すてっぷ」生は、DVD で習った色の英語を使って、ワークブックの問題を解きながら、親子で英会話もする。例えば、保護者が「Do you like what color?」³⁾と聞くと、子どもが「I like color orange and yellow.」と答え、自分が言いたいことを言おうとする様子が見られた。「じゃんぷ」生になると、質問されなくても、独り言のように、さらに長めの英語をつぶやく姿も見られた。例えば、ワークブックにシールを貼る場面で、「I like orange, one, two, three, four. Four stickers, okay?」と発声していた⁴⁾。

「じゃんぷ」には、DVD で、「What do you like?」「What do you have?」「What can you do?」の質問に対して、子どもが今まで習った英語を使って、自分なりに自己表現する課題がある。DVD で「What do you like?」と質問され、その直後に「君も答えてね！」と声を掛けられると、積極的に答える。「じゃんぷ」生によっては、自分の言いたいことを一生懸命に考えてしまい、時間内に答えられないことがある。しかし、後にワークブックで同様の活動をするとき、ときには保護者の助けを得ながら、自分の言いたいことを英語で言う。言えたときの表情は喜びに満ちている。また、「can」を使って自己表現するときに、言っている動作を実際にしながら発声することがある。例えば、「I can skip.」と言いながらスキップする様子や、「I can swim.」と言いながら泳ぐ動作をする様子が見られた。

最後に、「じゃんぷ」生と「すてっぷ」生を分ける大きな違いは、「じゃんぷ」生が、英語の音声から、習っていない意味や構造を推測する力をいくらか獲得していることかもしれない。これは、DVD 以外の教材に取り組んでいるときの発声からうかがえる。例えば、ある「じゃんぷ」生は、ワークブックで自己表現活動をしているときに、保護者との会話の中

で、効率の良い作文の仕方に気づいた。母親「Yくん, What do you like?」子ども「I like cookies.」のやりとりの後で、母親が「I like cookies. もうひとつ。I like chocolate. かな。」と言うと、子どもが「あー、わかった！ I like chocolate, cookies.」と言った。つまり、「like」の目的語として、自分の好きな「chocolate」と「cookies」を並列する発声をした。「and」は言い忘れてしまったものの、2つの文をまとめて「I like chocolate and cookies.」と1つの文で言えると推測したと考えられる。また、ペンタッチ式の学習用音声教材で、職業に関するクイズを解いていた他の「じゃんぷ」生は、「florist」という音声を聞いて、「あ、flower だからおはなやさんね」と言って、生花店をタッチして正解した。つまり、音声を聞いて、関連語を推測した。同じ「じゃんぷ」生は、ワークブックで「T, タ, Taxi」と言っていた。Tと[t]のフォニックス的なつながりにも気づき、文字と音の関連を推測したと考えられる。

興味深いのは、このような高度な推測力を働かせる様子を子どもが見せるのは、約3年間英語学習を行い、英語で簡単な自己表現ができるようになる「じゃんぷ」レベル修了の頃だということである。状況に合わせて使う会話表現(例：Here you are.)の発声と異なり、言葉の一部を自分なりに選ばなければならない自己表現(例：I like ○○.)の発声は、ある程度の量の英語に接触し、意味を覚えた英語が蓄積されていなければ起こらない。しかも、蓄積された英語はいつでも使える状態に整理されていなければならない。そのような英語から特定の言葉が選ばれて、自己表現が起こっていると考えられる。このような段階に達して、初めて推測力が働くのかもしれない。

3. おわりに

本研究では、就学前幼児が、発達段階に適した英語学習教材を用いて英語学習している様子を録画ビデオで観察して、彼らの英語習得の実態調査を行った。DVD教材、ワークブック教材、音声教材を活用する際の子どもの様子と彼らの英語の発声に注目し、子どもが習得している英語力について考察した。

本研究では、子どもは、幼いなりに、能動的な英語学習者であることが明らかになったように思う。発達段階に適した教材が与えられたとき、子どもは足場を得て、能動的に学習する様子がうかがわれた。保護者も、学習環境の準備、声掛け、英語学習支援など、様々な足場を与えている。複数の足場によって、子どもは実質的な学習を行うことができ、英語習得していることがわかった。子どもは発達段階に応じて、自分の特性と与えられる支援を活かして、年月をかけて英語学習を行い、その結果、英語力を習得している。つまり、子どもが幼いから自然発生的に英語習得が起こるのではなく、むしろ、幼い子どもの特性が活かされ、人為的に英語習得が起こっている。発達段階を考慮して制作された教材の内容や、保護者の支援によって、この能動性が活性化されるとき、子どもの英語学習が成功し英語習得が促される。

観察の中で、子どもの英語学習者が習得する英語力と学習者としての特性も浮き彫りになった。英語学習1年目に、日本語と英語をまとめて聞いてしまうほどの「ぼけっと」生(2歳～3歳)の「耳の良さ」と「まねの上手さ」、英語学習2年目に現れる「ほっぷ」生(3歳～4歳)の「意味へのこだわり」、英語学習2年目以降の「ほっぷ」生、「すてっぷ」生、「じゃんぷ」生(3歳～6歳)に見られた発声の「英語らしさ」(英語の発声だけでなく、日本語に相当する英

語が思いつかず「緑」を「ミドーリ」、「はさみ」を「ハサーミ」と言う際の発声も含む)、英語学習2年目の「すてっぷ」生(4歳～5歳)の「英単語の知識の定着」や、英語学習3年目の「じゃんぷ」生(5歳～6歳)の英語による簡単な「自己表現力」と英語の語彙や文の構造に関する「推測力」の出現など、興味深い発見があった。

国際語としての英語教育は、世界で活躍する日本人の育成の一端を担う。早期英語教育において、子どもの能動性を育む英語教材の制作、英語教育の支援、これらを支える研究調査は、三位一体で、今後も貢献に期待が寄せられることだろう。

注

- 1) 2011年3月から「ぼけっと」教材の配信が始まったため、本研究の「ほっぷ」生は「ぼけっと」を受講していたが、「すてっぷ」と「じゃんぷ」生は「ぼけっと」は受講せず、「ほっぷ」から受講していた。教材は、一部差し替えがあったが、カリキュラムに変更はなかった。
- 2) 全体的なイントネーションは合っていたが、個々の単語の発音、特に「f」「v」の唇歯音が弱く、はっきりと聞こえなかった。語尾の子音「t」が消失する現象と同様、子どもにとって、日本語にない発音を正確に行うことは難しいようだ。保護者が文の発声を認識できたのは、DVDを見てその文を聞いており、ワークブックにも同じ文が書いてあったためと考えられる。
- 3) 保護者は必ずしも英語が得意なわけではなく、不完全な英語を発声することがある。英単語に関しては、日本語訛りの発音をすることがあるが、意味を間違えることはほとんどない。
- 4) この学習者の保護者は、英語が得意なわけではなかったが、学習者が言いたいことを英語で言おうとするとき、関心を示し、英語と一緒に考えるなどして支援していた。このように、子どもの能動性が促されていたことが、子どもの英語によるつぶやきの発声と関係していたのではないかと考えられる。